

平成27年度 三重大学教育学部附属中学校 学校関係者評価書

評価項目	本年度の活動	具体的な手立て	達成状況	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点	
教育研究	公開研究会	<p>「ともに学びともに高めあう学校の創造」～生徒が夢中になる授業づくり～」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>生徒が主体となった授業づくりを行うことにより、学びに対する意欲を向上させ、学力向上を図る。</li> <li>個々の生徒が互いにつながりあい、「ともに学びともに高めあう」ことへの取り組みを通して、教科の学びの本質に迫る授業を創造する。</li> <li>教育学部との緊密な連携のもとに、校内研究を推進する。</li> <li>来年度の公開研究会にむけて、一人2回以上のべ60回以上の授業公開を行い、生徒一人ひとりの学びを大切に授業づくりに努める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>今年度は公開研究会を行わない。</li> <li>H28年11月の公開研究会に向けての準備を進めていく。</li> <li>11月19日に「ミニミニ公開研」を行う。</li> <li>年間21回の研究会</li> <li>1学期1人1回以上、2学期授業公開週間(11月16日～18日)</li> <li>教科部会の充実</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>助言者、司会者、四附の先生に授業を見ていただいた。また、公立中学校にもよびかけたところ、12人の先生に参加していただいた。</li> <li>計画通り実施できている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>公立中学校との連携を考えていくうえで12人の先生に来ていただけたのはよかった。今後、研究よりの発行なども含めて、公立中学校への情報発信について考えていかなければならない。</li> <li>年度初めに立てた計画にそって進めているが、講師などにより、変更になった部分もある。計画外で研究会を開催しようとしても、なかなか予定があわない。</li> <li>2学期授業公開週間は学校公開ともあわせる予定だったが、できなかった。</li> <li>1人教科の教科部会をどのように運営していくか。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>附属には附属らしさが求められる。抜本的な改革も含め大いにアピールできる機会になればと思う。誰もが見てみたいという授業が実践されるといい。</li> <li>学期に一人一回以上の授業公開は、教師の資質向上の良い機会であり、取り組みであると思う。公立の先生などにも声掛けをして授業を公開することだけではなく、そこから生徒のためのよりよい授業改善と具体策につなげ、参加した教師の今後の知見の共有が大切である。その点、達成状況や成果に「参加していただいた」や、「情報発信について考えていかなければならない」とあり、検証を機能させていく具体性には乏しいと思われる。</li> <li>津市をはじめ市町の先生方の参考になるような、先進的な取組にチャレンジしてほしい。</li> </ul>	<p>夏のミニ公開 公立中学校への積極的な呼びかけ 11月公開 (4日協同学習学会、13日公開研究会) 研究紀要づくり 実践例を通じた研究の振り返り</p> <p>公開研究会のアピール</p> <p>見に行きたいと思える企画の工夫 「夢中」というテーマから、単元計画や授業の導入、学び合いの姿に力点を置きたい</p>
	日々の研究	<p>学習指導要領の趣旨に基づいた教育の実践</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>文部科学省や県教育委員会が主催する各種講習会・説明会、県内外を問わず先進的实践を行っている学校等への視察を積極的に進めるとともに、その成果を校内で還流し、喫緊の課題、先行研究等について共通理解を図る。</li> <li>教育実習の取り組みや、外部からの研修会講師招聘の要請に応えることで、教職員の資質の向上を図る。</li> <li>生徒の視点に立った授業アンケートの実施や教科内での授業分析を通じて、生徒の変容や研究の進捗状況をとらえ、研究の狙いの共有を図る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>県総合教育センターの初任者研修における、必修研修(授業公開と教科別研究会)の1日を担った。</li> <li>文部科学省や県教委の主催する各種研修会・講習会へ参加した。</li> <li>県内小中学校、市町教委、県内各種研究会からの要請に対し、講師を引き受け、教職員の資質向上を図る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>初任者研修等とリンクして自らの研究の機会とすることができたが、事前の指導案検討などにさらに注力すべき余地がある。</li> <li>文部科学省や県教委の主催する研修会、指導主事等連絡会議で研修できたことは附属教員としての見識をふかめることになった。ただし、それを本校の研究活動とどのようにつなげるかという視点をもって今後取り組む必要がある。</li> <li>教科部会を用いた日常的な研究活動がなされたが、こうした活動に用いる時間がまだ少ない点が課題である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習指導要領の改訂をにらみつつ、今後どのような教育活動を作っていくべきかについて、一定の成果はあり、教員の知見も深まった。授業力の向上についても様々な機会をとらえて取り組み、公開研究会の参加者からの評価も概ね良好であった。</li> <li>上記のような成果はありつつも、次期の学習指導要領の方向性への理解をさらに深める必要がある。また、それを実現していくための、さらなる授業力の向上を図る。</li> <li>附属中学校の果たすべき役割を考えた場合の、県教委との連携の必要性がある。</li> <li>教員の自主的な研修が少ない状況がある。自ら学び、考え、実践する自主性を高める必要がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業づくり、授業研究は普段の地道な実践、研究の積み重ねによって進んでいくものである。1人2回の授業公開は先生にとって検証の確かめの機会として大切である。</li> <li>研修会や研究会等への出席言及が多く、具体的な教育内容改善事項、「言語の力をはぐくむ」、「理数の力をはぐくむ」、「外国語教育の充実」、「伝統や文化に関する教育の充実」、「体験活動の充実」、「道徳教育に関する充実」、「健やかな体を育てる」、「社会の進展に対応した教育」に関する達成状況、成果、課題などが日々の研究として報告されていないように思う。</li> </ul>	<p>新学習指導要領の趣旨をふまえた先行実施 国立教育研究所との継続的な連携 公立中学校への発信 学校評議員への積極的な案内</p> <p>附属ならではの授業づくりに挑戦 教科部会での対話の活性化 学部との継続的な連携</p> <p>計画的な公開 学期に1回授業公開公開 計画的なベンチマーキング</p>
学習指導	少人数指導	<p>少人数学習の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1年英語科において少人数学習を取り入れ、それぞれの生徒に適切なきめ細やかな指導を充実させる。</li> <li>学習習慣の定着や自律して学ぶ態度を養う。</li> <li>2年英語科において、少人数学習を取り入れ、文法指導と本文クラスに分かれて授業を行った。個に応じた指導をすると共に、小グループで学習する機会を設定した。</li> <li>1年、2年の数学科において、TTによる授業を行い、個に応じた指導の充実を図る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>英語科にあっては、1年生で少人数学習を取り入れ、中学校で初めて学ぶ英語科について、中1ギャップの視点で支援し、小学校外国語活動とのなめらかな接続ができるようにする。1クラス36名を教室と国際理解教室の2つのグループに分け、それぞれ英文法・新出語句を中心とした授業と教科書本文を中心とした授業を行う。今年度より2年生も少人数学習を取り入れた。2年生も昨年1年生で少人数学習を経験しており、1年生と同じようなスタイルで授業を行う。</li> <li>数学科では、T2が生徒の理解度を把握したり、つまづいている生徒への個別指導を行ったりするだけでなく、T1とT2のやりとりを生徒に聞かせたり、T2が生徒に発問を投げかけたりすることで、授業の活性化を心がけた。また、T1が提示した問題を、T2がわざと誤った解き方を板書し、「どこに誤りがあるか。なぜそのような誤りが生じたか。」を考えさせ、つまづきの原因を明らかにさせるようにした。具体的には、1年、2年において上記の運用を行っている。</li> </ul>	<p>(英語科)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>文法クラス、本文クラスで違った内容の授業を行っている。高等学校で実施されている方式に近い形を取っている。</li> <li>教室では、主に新出単語の発音・意味の理解、文法説明、プリント演習、グループ発表を行った。国際理解教室では、デジタルテキストを使用し、教科書内容の導入動画、フラッシュカード、本文の読解説明等で授業を進められている。生徒たちは、交互に教室と国際理解教室を移動し、全員が同様の内容を受けることができるシステムになっている。</li> <li>授業では、英語でのスキット(短い英語劇)を全員に実施した。少人数であったおかげで、一人ひとりにきめ細かい指導を行い、基礎学力の低い生徒も、全体発表に積極的に取り組んでいた。(数学科)</li> <li>2人の教師が生徒の理解度を把握できたので、つまづいている生徒への個別指導がスムーズに行うことができた。また、ペアによる教え合いに教師が関わったり、2人の教師のやりとりを意図的に行ったりすることで、授業が活性化され、わからないことを自由に尋ねたり、自分の考えや疑問・発見等を全体に出したりする雰囲気が生まれた。</li> <li>どのようにすれば数学的に説明したことになるのか、全国学力学習状況調査においても全国的な課題とされていることがらについて、2人の教師がディベートを展開するところを見せる場面において、見本を示すなど、きめ細やかな指導ができた。</li> </ul>	<p>英語科</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>少人数教育を行うことによって、より多くの生徒が授業で発言することができ、わからない生徒にも時間をかけて指導することができた。全員が発表する時に時間が短縮でき、授業前半で全員の発表を行った後、別の内容を指導する余裕があった。</li> <li>2人の教師が考えを出し合って、内容が充実した。</li> <li>少人数教育で身につけた英語への意欲は、学年が進んでも生徒たちの中に残ると思われる。</li> <li>2人の教師がそれぞれの教室で別々の内容を指導するために進度調整や内容確認を今後もする必要がある。</li> </ul> <p>数学科</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ペアによる話し合い・教え合いへの教師の関わり方や、グループ活動への関わり方を工夫し、「わかった」「できた」等の達成感・満足感を1人でも多くの生徒に味わわせる指導が不十分であった。</li> <li>T1、T2のやりとりの場面を工夫し、生徒が興味をもって主体的に取り組む授業という点では、まだまだ改善の余地がある。</li> <li>数学的に意義のある振り返りについて、精度を高めていく必要がある。</li> <li>TTを採用することにより見本となる考え方を有効に提示し、それを読み取って他の類似場面に適用するなど、学習指導要領で新たに示された例題を活用した振り返りについて大きく可能性と手法を得ることができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>英語の「成果」にあるように、1、より多くの生徒が授業で発言できる。2、わからない生徒への指導ができる。3、全員の発表のあと違う内容の指導ができる。など、余裕のある授業は、学びの「場」として生徒にとり心地よいものだと思う。</li> <li>数学では、授業内で「数学的に意義のある振り返りをするのが難しい」ことがわかる。文科省による、生きる力を養うための家庭用配布資料には「数学的活動」の充実とあり、自己評価達成状況内では、「2人の教師のやりとりを意図的に行うことで授業が活性化し、それを見ている生徒の意見も全体にできるようになった」とある。良い活性化とつながりが感じられる。</li> <li>少人数のグループわけは習熟度別にして、できる子にやりがいをもたせ、さらに伸ばしていくのもひとつの試みである。生徒がグループを自由に移動できる試みも主体性を育てる上でもおもしろい。</li> <li>個々の生徒の学習効果を高めるために、さらなる工夫と検証を重ね発信してほしい。</li> <li>少人数得教育は単にグループを分けて、それぞれの教師が指導してもなかなか効果が上がらない。指導方法、定着度の確認等共通理解を図りながら実践を積み上げていく。</li> </ul>	<p>英語；少人数、 数学；TTの継続 多様なあり方(伸ばす、ひろう)の工夫</p>
	学習環境の整備	<p>聴きあい学びあう関わり醸成</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「ともに高め合う学び」を継続して推進するため、生徒一人ひとりにとって、質の高い学びが実現できる学習環境を整える。</li> <li>各種客観調査の導入とそれに基づいたPDCAサイクルの構築及び改善項目の精査</li> <li>全国学力・学習状況調査をもとに、生徒の実態把握とその改善項目の実践を進める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>4人班を基本とした学習基盤づくり。</li> <li>全国学力・学習状況調査の結果を分析し、教科の内容や、生活習慣をはじめとした学習状況を、それぞれ把握し、改善する。</li> <li>新学習指導要領に準拠したシステムづくりを進めるとともに、新学習指導要領の内容把握にかかる学習会の機会を増やす。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>具体的な取組のおおよそを実施することができた。特に、グループ学習の取り入れ方については、教師間で共通理解ができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>概ね安心安全の学習環境を作れたように思う。生徒指導上も、学級づくりも全職員の共通理解のもと、活動できた。</li> <li>学力調査の分析等は、該当学年の扱いにとどまり、全職員のものとならなかったことが、課題である。</li> <li>環境整備のために、教師自らが研修・研究に取り組む姿勢が少しづつではあるが見おられた反面、現状改善をしていこうという意欲に欠ける面もあった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>4人のグループ編成はしっかり定着しているように思う。ただ形式化、マンネリ化すると退屈な緊張感のない時間になる危険性もあると思う。</li> <li>4人班を基本とした学習環境の基盤が報告されている。学校全体の学習環境面でのメタ認知という意味では、全国学力・学習状況調査の分析などが行われていることがわかる。しかし全職員のものとはならず、該当学年(中学3年)の分析扱いだけとなっていることが自己評価されている。せつかくの分析は共有することに意味がある。安心安全の学習環境は何より大切である。</li> </ul>	<p>対話・居場所感が生まれる教室づくり</p> <p>四附連携が実感できる学校間の連携のあり方を考えるところから具体的な実践に移していく</p> <p>実践の振り返りをふまえたシラバスの継続的改善</p>

教育実習	<p>教員個々の資質向上</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教育実習の指導を通して教員個々の指導力向上の機会と捉える。</li> <li>生徒の学習の機会</li> <li>・教育実習を通して、実習生と生徒の触れ合いを互いに学ぶ機会とする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育実習生の指導を通して、授業の在り方を見直す機会とするとともに、教員の資質向上に役立てる。</li> <li>・新学習指導要領の言語活動の充実について、教育実習生の指導の機会を利用して、精査する。</li> <li>・実習生と生徒の触れ合う機会と捉え、生徒のコミュニケーション力等について観察・指導する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各クラス、教科で指導できていた。</li> <li>・2、4w実習中、課題はあるものの、全職員で解決し、指導することができた。</li> <li>・ほとんどの実習生は、前向きに取り組んでいる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習生の持つ課題を把握し、助言・指導ができた。</li> <li>・一部ではあるが、前向きに実習に取り組めない学生がおり、他の実習生との落差を縮める工夫が必要である。</li> <li>・教科によって評価点数に差が出ている。より明確な評価基準を設定し、共通理解を図っていく必要がある。</li> <li>・実習生に力をつけていくために教師も指導力を高める必要がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育実習生にとっての指導見本は現場教師であることは間違いない。「教員の資質向上」のために何が出来るのかは、「現場教師」が「実習生」を通じて学べる機会でもある。「実習生と生徒が触れ合う機会の中で、コミュニケーション力等を観察指導する」とあるが、実習生、生徒双方にとってお互い良い評価が期待できる「場」だと思う。また、そういういつもと違う「場」を作っている現場の配慮、現場力が評価できる。実習生の立居振舞、礼儀作法等への指摘も必要だろう。</li> </ul>	<p>実習を学ぶ機会に生徒理解一人ひとりの学びの省察</p> <p>特練の授業参観に学級担任を加え、評価の見直しはできないか</p> <p>教科の学びの本質を伝えていこう</p>
キャリア教育	<p>教科学習を通じたキャリア教育 学校行事を通じたキャリア教育 地域の人々や先輩から学ぶ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あらゆる教科教育の中で、生徒個々のキャリア形成を図る。</li> <li>・行事の中で自主的に生徒が企画し、活動する場面を設定する。</li> <li>・社会見学や修学旅行の取組を通して、地元の人々との交流や平和学習、資料から、人権や平和などに寄与する姿勢をもつことにより、生徒個々のキャリア形成を図る。</li> <li>・3年間を見通して、生徒が進路選択に至るまでの自分を見つめ直す機会を設定する。</li> <li>・本校のキャリア教育に関する保護者啓発を図る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キャリア教育講演会を実施し、社会で活躍されるOBの姿から働くことの意義や社会に貢献するとはどういうことかを考えることができた。</li> <li>・各学年にて「職業調べ」「高校調べ」などを実施したり、さまざまな学年行事を通して、学んだことを学年集会や文化祭で発表したり、壁新聞を作成したりすることができた。</li> <li>・全学年でキャリアカウンセリング（教育相談）を行うことができた。</li> <li>・生徒会によるスマイルセッションでは、学年の枠を超えて学校生活や勉強の方法を話し合ったり、国際理解教育におけるキャンパスツアーでは留学生に大学を案内してもらったりする等、本校ならではの取組をすることができた。</li> <li>・学年・学校通信やHP等により、本校のキャリア教育について発信をすることができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各学年の発達状況に応じた進路学習を行うことができた。</li> <li>・キャリアカウンセリング、キャリア教育講演会を実施することができた。</li> <li>・本校のキャリア教育に関する保護者啓発が十分にできていない。</li> <li>・地域人材の積極的な活用を図る。</li> <li>・3年間を見通したカリキュラムの構築を行う必要がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キャリアに関して、教師は現実の社会において、最も他のキャリア経験の少ない職業とされていることから、自ら進んで異業種の人との交流が必要である。多様性への理解がなければ生徒へのキャリアカウンセリングも難しい。生徒同士枠を超えてのスマイルセッションは、評価できる。</li> <li>・職場体験に取り組むことは社会のつながりを体験し、社会の一員としての自分を意識することになりとても大切である。</li> <li>・福祉体験、大学の仕事体験など三重大との連携を附属の特色としてアピールしていきたい。</li> <li>1年の社会見学を再考し、職場体験活動に移行させてはどうか。</li> </ul>	<p>3年間を見通した学年行事の見直し</p> <p>公立中学校100%国立学校62%の実施率である職業体験を取り入れていきたい。初年度なので、三重県社会福祉協議会の事業を活用することから始めて行きたい。</p>
生徒指導	<p>集団の育成と活気ある学級づくり 生活指導体制の充実 学習習慣の確立と授業の充実 諸活動への取り組みと充実 教育相談体制の充実 規範意識の醸成</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学級での係活動や班活動の充実を図り、生徒一人ひとりの活動の場を設ける。</li> <li>・家庭との連携を密にし、教師・生徒・保護者との相互の信頼関係の構築や共通理解に努める。</li> <li>・全職員が共通理解を深める機会を定期的に設け、統一した指導を進める。</li> <li>・生徒指導部会を定期的に開き、各指導部の情報交換や指導の徹底を図る。</li> <li>・基本的な生活習慣(礼儀、身なり、けじめ、時間など)の育成を図るとともに、規範意識を高める指導に取り組む。</li> <li>・養護教諭、スクールカウンセラーとの連携を密にして指導の徹底を図る。</li> <li>・学習規律の定着を図る。</li> <li>・生徒会執行部、生徒議会との連携を密にし、活動の活性化を図る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全職員であったることができていた。朝の挨拶から授業間の見まもりが全職員で取り組む体制が整備されつつある。</li> <li>・マニュアルの作成を含め、学校全体で共通認識を高めようという体制を構築でき、全体で共有する体制になっている。</li> <li>・学年団を中心として、問題行動については協働して解決できている。</li> <li>・学年や学校全体、SCに問題の共有や相談がしやすい雰囲気を作られている。学年での報告、連絡、必要に応じて会議を持てた。統一しようという意識が教職員の中に見られる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・共通理解はされているが、共通実践はまだまだである。</li> <li>・職員会などで情報共有がはかられているが、日常的な他学年の生徒の様子はわからないことが多く、情報共有の難しさを感じる。</li> <li>・マニュアルの作成を含め、学校全体で共通認識を高めようという体制になっている。全体で共有する体制になっている。</li> <li>・生徒指導担当や学年主任、管理職の方に相談できる環境があり、大変有難かった。</li> <li>・マニュアル通りでは解決の糸口を見出すことはできない事例が多いが、個々の判断での行動ではなく、協働の体制で対処できるよう努めていきたい。</li> <li>・学年、学校全体で共有や相談がしやすい雰囲気を作られている。学年での報告、連絡、必要に応じて会議を持てた。</li> <li>・統一しようという意識が教職員の中に見られる。</li> <li>・SCとの話し合いの機会があるのでよい。</li> <li>・スクールカウンセラーとの接点が少ない。</li> <li>・あいさつは全職員から行っているが、生徒は自ら進んではできていない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒一人ひとりを大切にし、その成長変化をしっかりと捉え支援している姿勢がよくわかる。</li> <li>・基本的な生活習慣の改善は、学校だけでは成せず、家庭での躾や社会との関わりが必要である。またその全体における規範意識等も大切である。今後、『私たちの道徳 中学校版』などの活用が有効かと思われる。また、生徒指導として、各自の自己効力感や自己肯定感を大切に指導することがまず大切であり、そのことが集団への活気につながり、よい循環が生まれるように人格を育てることが必要がある。生徒一人ひとりが活躍できる「場」をいかに教師が作っていけるか、教師が多忙の中での係、班、生徒会等への関わり方も大切かと思われる。</li> <li>・問題行動に関しては、スクールカウンセラーとの密接なかわり方がより必要かと思われる。</li> </ul>	<p>週30時間から週29時間の週時程への切り替えを考えたい。そして、生まれた1時間を生徒会活動や教育相談、部活動にあて、共に活動する時間の保障していきたい。</p> <p>生徒指導の重点 あいさつ・そうじ・部活動 活動の取りかかり 下校指導の徹底</p> <p>家庭との連携</p>
人権教育	<p>人権学習の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「ともに高め合う学び」や人権学習を通して、自分自身を大切に、周りも大切にできる生徒を育成する。</li> <li>・人権尊重の精神に立った学校づくりに取り組むために、「人権が尊重される学習活動づくり」、「人権が尊重される人間関係づくり」、「人権が尊重される環境づくり」の3つの視点で取り組む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人権教育指導計画を見直し、生徒の発達段階に応じた系統的な人権学習の展開を図る。</li> <li>・仲間づくりを通して、自分の大切さとともに他の人の大切さを認めることができる生徒を育成する。</li> <li>・全教科・全領域において、「共同的な学び」を軸に人権を大切に学習活動を展開する。</li> <li>・人権教育講演会を開催し、現状と課題、目指す目標と具体的な取組を共通理解し、道徳の授業や総合的な学習の時間だけで人権教育に取り組むのではなく、教科指導、特別活動、教科外活動、生徒指導、学級経営等、全ての活動で取り組む。</li> <li>・「いじめは許さない」取り組みを進める。</li> <li>・心を育てる取り組みを通して、自尊感情を培い、他人を大切に思える気持ち（目配り・気配り、心配り）を身に付けさせる。</li> </ul>	<p>生徒 人権講演会参加（長島りょうがんさん） 教師 橋北中学校区人権活動実践交流会参加・津人教支部研究大会参加</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現行のまま、人権活動を継承していく。</li> <li>・先生方には、津人教等様々な催し物に参加してもらいました。今後も協力をお願いしたいと思います。</li> <li>・本年度も人権講演会を開催しました。次年度も開催をしていく予定。少しずつの人権学習に対する取り組みが地道な人権意識の向上に結びつくものと信じている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「人権学習」の取組は弱い。意識の改善までいっているのかと思うと疑問である。</li> <li>・学年によって人権教育の実践に差が出ている気がする。普段の授業や生徒との関わりの中で、人権について考えさせるような言葉かけを心がけた。</li> <li>・仲間づくりに関しては、授業、休み時間を通して生徒の様子から指導を行っているが、生徒の自発的な姿勢に働きかけることが薄かった。まず我々が職場の仲間を思いやりたい。</li> <li>・少しでもやらないよりやる方が良いと思える人権教育を進めていきたい。生徒と共に教師も学んでいければと思う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「人権学習」の取り組みは弱いとあるが、1年生の社会見学の場所設定、および3年生の文化祭での沖繩戦の発表等で見える限り、そのようには思わない。学習指導要領の改訂のポイントなどが反映されていないことの方に注目する。「伝統や文化に関する教育の充実」や「道徳教育の充実」の言葉は、この評価表全体に一言も出てこない。</li> <li>・道徳教育の充実を図ることは大切である。教師の意識改革、年間計画の作成等課題はあるが、全職員が組織的に取り組む道徳教育を進めていかなければならない。</li> </ul>	<p>人権学習を取り込んだ道徳教育の充実 道徳年間計画の見直しと時間の確保</p> <p>思いやり・居場所感を柱とした集団づくりの実践</p> <p>橋北中学校校区の人権学習関係交流事業と津人協研究大会への参加は継続していきたい</p>
特別支援教育	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特別な支援の推進に必要な条件整備を行う。</li> <li>・生徒一人ひとりの教育的ニーズを把握し、適切な対応を図る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者の了解のもと、支援計画や指導計画の作成に取り組む。</li> <li>・教科の学習において、特別な支援を要する生徒への支援体制を整える。</li> <li>・学習支援ボランティアを活用した支援体制の推進に取り組む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各学年で困り感のある生徒を把握し、SCの助言を受けることができた。</li> <li>・各学年の情報を職員会議で共有することができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特別な支援を必要とする生徒の個別の指導計画は作成できたが、その共通理解が不十分であった。また、その都度、状況に応じて作成の見直しを図る必要があると感じた。</li> <li>・四附間で支援・指導計画が必要な生徒の情報交換ができ、助言を頂くことができた。今後さらなる連携が必要と感じる。</li> <li>・保護者との共通理解を深めるツールとしての活用や指導計画の更新はできなかった。</li> <li>・学習ボランティアを活用した支援体制の推進には取り組めていない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今後、臨床対応も含むスクールカウンセラーの対応は、一般的にも益々増えるものと思われる。生徒の様子を教師が早く把握し、カウンセラーと協働するなど、より細かな、その都度の配慮が必要だと感じる。</li> </ul>	<p>個別の支援計画から具体的な対応へ</p> <p>学期に1回、教育相談週間の実施</p>

国際理解教育	<ul style="list-style-type: none"> <li>・天津市実験中学との交流</li> <li>・留学生を招聘しての国際理解学習</li> <li>・三重大学の先生を招聘しての中国に関する国際理解学習</li> <li>・三重大学の学生を招聘しての国際理解学習</li> <li>・学校行事や総合の時間を通した国際理解学習</li> <li>・国際言語である英語の習得をめざしたイングリッシュキャンパスツアー（今年度は、希望者のみ）の実施（留学生を招聘）</li> <li>・中国からの留学生を招聘して、中国語講座の実施（今年度は、希望者のみ）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・天津市実験中学と交流を行うことで、生徒の視野を広げ、国際社会で活躍していく人材としての意欲を育む。</li> <li>・英語の必要性を実感する機会とする。</li> <li>・留学生等を招聘し、交流学習をすることで、異文化理解を深め、グローバルな視野を広めるきっかけとする。</li> <li>・調べ学習や社会見学への取り組みを通して、外国人の人権や共生について学習をする。</li> <li>・イングリッシュキャンパスツアーの実施により、コミュニケーション能力と英語学習への意欲向上をめざす。</li> <li>・中国語講座の実施により、英語以外の外国語や英語圏以外の文化についても視野を広げる機会とする。</li> <li>・「動く！附中生徒」をキャッチフレーズに、すべての活動場面において、生徒が主体的に活動できる仕掛けをつくる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・天津市実験中学を生徒4名と教員3名で訪問した。異文化を理解し、国際協調の大切さを考える機会をもつことができた。</li> <li>・中国の留学生を招いて、他国の文化に親しみ、国際社会で互いに理解し合うことの大切さを学ぶことができた。</li> <li>・イングリッシュキャンパスツアーを実施し、国際言語である英語学習への意欲を高めるきっかけとすることができた。</li> <li>・イングリッシュキャンパスツアーを通して、様々な国の文化を知ることができた。</li> <li>・文化祭では、希望者を中心にスピーチや英語の歌、天津実験中学訪問報告などの発表をすることができた。</li> <li>・天津実験中学訪問生徒については、現地から進んでコミュニケーションを取るなど、積極的に行動することができた。また、自信を持つことができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・天津市実験中学との交流に向けて、調べ学習や留学生との事前学習会を行い、中国の伝統や文化について関心や理解を深めることができた。また、実験中学の生徒との交流を通して、相互理解・協働の重要性を学ぶことができた。今後、教職員間でさまざまな実践交流をし、学びあえる場が広がっていけばと思われる。また、せつかくの貴重な体験をもっと全体で共有できるように仕組みや仕掛けを考える必要がある。</li> <li>・各学年で学校行事や教科との関連の下、国際理解学習を進めることができた。</li> <li>・グローバル人材の育成をめざした取組の1つとして、本年度イングリッシュキャンパスツアーを開催することができた。</li> <li>・イングリッシュキャンパスツアーでは大学と連携することができた。</li> <li>・天津市実験中学との交流が単発的なものとなっているため、年間を通した継続的な交流のあり方を検討していきたい。</li> <li>・留学生をもっと活用していきたい。</li> <li>・附属であることを生かして、大学と連携を取る際は、手続きの簡素化や講師の謝礼の低価格化が実現するとありがたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学連携でのイングリッシュキャンパスツアー等、評価できる。来日中の留学生との頻繁な交流機会は、附属中学校ならではの特徴である。機会を数多く持ち、あらゆる「多様性の場」の設定を行うことを期待する。</li> <li>・長く天津市との交流が続いているようだが、3年に一度、行き先を変えるなどの変化があっても良いのではないかと。生徒に行き先の選択肢が広がるのではと思う。大学連携との手続き簡素化や低価格実現の費用面での指摘は、早急に対応すべきだと考える。</li> </ul>	<p>大学留学生の活用 イングリッシュキャンパスツアー</p> <p>青少年赤十字の国際交流事業の受け入れなどの活用</p>
教育相談	<p>日々の学校生活における生徒の悩みを聞き取ることににより、生徒理解を進める不登校となっている生徒への対応を進めるとともに、不登校を未然に防ぐ取組を進める。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育相談を学期に一度行う。</li> <li>・学校に来ることだけを目標とするのではなく、個々にあった対応を考えていく。</li> <li>・不登校生徒宅への家庭訪問を定期的に行い、保護者、本人との連携を密にする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育相談といじめアンケートの結果の聞き取りを実施し、生徒指導との連携を取ることができた。</li> <li>・不登校生徒に対しては担任による家庭訪問を定期的に行うことができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学級担任、副担任を中心に学年団が連絡を取り合っており、対象生徒に関わる体制ができている。</li> <li>・教育相談期間にしか生徒とじっくり話をすることができていないことが多く、日頃からの生徒理解が観察法に頼る状況になっている。</li> <li>・不登校生徒や悩みを抱えた生徒・保護者とSCを積極的につなぐことが必要であり、そのための方策として、教育相談担当が担任・学年団にはたらきかけをしていくことが必要である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・さまざまな取組をしているようだが、附属の特性や中学校の特性を踏まえた大学との連携を強化してほしい。</li> <li>・対応はデリケートな問題もあり、現場の先生方は、多忙の中苦労されていると思う。早い段階でのスクールカウンセラーとの細かな連動、相談が大切かと思う。</li> </ul>	<p>いじめアンケートの実施</p> <p>学期に1回、教育相談週間</p> <p>不登校生徒への対応を個に応じた進めたい</p>
生徒会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒会や学年、クラスのリーダーを中心に、生徒の企画運営力を育て、リーダー性が発揮できるように指導する。各委員会活動を活性化させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・定期的に活動部会を行い、各活動部の活性化を図る。</li> <li>・体育祭や文化祭などで、生徒が主体的に企画、運営をする。</li> <li>・ユネスコや赤十字の団体に関わることににより、それぞれの活動に積極的に参加する。</li> <li>・「動く！附中生徒」をキャッチフレーズに、すべての活動場面において、生徒が主体的に活動できる仕掛けをつくる。（附中smilesession等）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昨年度よりも工夫して、主体的に取り組むことができています。体育祭、文化祭等の行事が生徒会を中心として、円滑に運営されている。体育祭では、「安全」を一番に考え種目を大幅に変更した。文化祭では、生徒会独自の発表がICTを用いて実施された。展示見学の時間を確保したので充実したものとなった。</li> <li>・縦割り活動によって、「附属全体」という意識が高くなった。</li> <li>・生徒が行事に積極的に取り組んでいるスマイルセッションなどで、新しい取り組みがあった。内容は、生徒たちの意見が尊重されたもので、スマイルセッションの定期的な開催や縦割りの活動を多く取り入れ、縦割りの意識が生徒の中に出てきた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本年度は縦のつながりを通年を通して意識することによって、【スマイルセッション、体育祭等】学年の枠を越えた交流が多く見られるようになった。</li> <li>・挨拶運動を毎日8：05～8：20の間行うことによって、生徒間つながりであったりコミュニケーション作りが活発に行われた。</li> <li>・スマイルセッション、学校祭縦割りの工夫等担当の先生方には大変お世話になっているが、生徒主体でというスタンスは今後も維持されるべきである。</li> <li>・活動部は、取組の内容を工夫し、更に生徒の自主的な活動を促していけるとよい。十分に工夫されており、意義が感じられるものであるが、新しくつくった分は旧来からのものを廃止・縮小しないと、教師も生徒もこなすだけで大変になっていくことを危惧している。</li> <li>・様々な新しい取り組みを行っているため、そのための事前の学活等が増えている。授業数との兼ね合いを考え精選する必要がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「動く、附中生徒」をキャッチフレーズに、スマイルセッションなど、生徒にわかりやすい取組を提示して活性化が図られている。特に、学年の枠を超えた学校全体、附属全体の取組が附属生としての意識、誇りに結びついて、効果的な活動になっている。</li> <li>・生徒の主体的な活動を支える教職員の負担があるように思う。行事の精選、活動時間の確保等前向きに取り組んでいく必要がある。</li> </ul>	<p>生徒会の主体的な姿勢を支援していきたい 行事の精選を進め、内容の充実を図る</p> <p>5限の日の設定 FCS、ESD 生徒会活動等の活動時間の保障</p> <p>他校、他機関との連携 津市中学校との連携 青少年赤十字の活動</p>
教育環境づくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内外の美化に努めることにより、教育環境を整える。</li> <li>・環境教育を実施することにより、生徒の環境浄化に対する意識付けを行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クリーン大作戦を実施することにより、生徒とともに教育環境作りを行う。</li> <li>・体育祭前の除草等の作業を通して、保護者と生徒・教職員が一体となった環境作りを行う。</li> <li>・整備活動部を中心に、日々の清掃活動を丁寧に行い、校内の環境整備を意識する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クリーン作戦（6／6）（9／5）を実施。生徒は、多数参加できたが、保護者の参加数が減った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クリーン作戦は、いずれも生徒や教師がしっかり取り組むことができた。保護者の参加が少なくなっている点を改善したい。</li> <li>・整備活動部を中心に、掃除用具の点検やトイレ用洗剤等の補充を日常的に行うことができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・すばらしい活動だと思う。保護者の参加が少ないとは、寂しい限りだ。保護者自身が問題意識をもって、何か考えることができるのではないだろうか。学校、保護者、地域との関わりの中でのクリーン大作戦は今後も継続していかねばならないよい取組だと思う。</li> </ul>	<p>学習環境の整備の欄に加え、育友会環境部のクリーン作戦の保護者出席率を上げたい</p>
開かれた学校づくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校評議員会（学校関係者評価委員会兼任）を開催し、学校自己評価・関係者評価の活動を通して、学校運営を見直す。</li> <li>・ホームページや学校通信を通して、保護者や地域の人々に本校の様子を情報提供する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校評議員会を年3回開催し、学校運営についての意見を集約する。</li> <li>・保護者や生徒、職員に対して、学校教育に関するアンケートを実施し、学校運営に資する。</li> <li>・ホームページを充実したり、学校通信を配付したりすることを通して、学校の様子を情報提供する。</li> <li>・学校公開デーを各学期で開催し、学校を広く公開する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校評議員会を（6／22、11／30、3／）に実施、いろいろなご意見をいただいた。</li> <li>・生徒、保護者へのアンケートを実施した。結果は、附中通信で保護者に知らせた。</li> <li>・学校公開デーを開催し、開かれた学校作りに努めた。</li> <li>・ホームページの更新を積極的に行い、新しい情報を発信することができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・評議員の方に関係者評価をお願いすることにした。また、4附での学校評価委員会でも評価をいただいた。</li> <li>・アンケート結果は、前年度より若干ではあるが高評価をいただいている。しかし、教育内容の不徹底や保護者支援など、改善点も見られた。</li> <li>・学校公開デーへの参加は、1日フリー参加としていることから、教室への出入りがしにくいとの声をいただいた。改良が必要。</li> <li>・ホームページのカテゴリー分けをすることで見やすくなった。</li> <li>・古い情報は削除していく必要がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ホームページが確実に更新されており、学校の様子がよくわかる。ぜひ継続させてほしい。</li> <li>・学校公開デーを各学期で開催し、学校を広く公開されることはすばらしい。このような恵まれた学習環境が作られていることも、広く地域にも見ていただければいかがだろうか。また、評価資料作成後、良い点と問題点を整理し、明確化、見える化したものを次回へのPDCA資料とすることを提案したい。全体的にみられる評価内容として、「出席した」、「参加した」、「高評価をいただいた」、「改善点が見られた」などでは具体的な内容がわかりにくく、評価の手立てともなっていく、次の改善への持続的対応も難しい。今後のオープンな情報発信にも期待したい。</li> </ul>	<p>外に向けての積極的な情報発信 ホームページの更新 学校だより・学年通信等の充実 研究情報のお知らせ</p> <p>学校公開デーの開催 土曜活動の検討</p> <p>行事について学校評議員への案内</p>